多くの作品を生んで
口語自由詩を確立した
業績は文学史に輝く足跡

授業をさぼって野原へ
中学・高等学校時代

小学生のころは神経質で臆病な性格から、いじめられっ子だった朔太郎。前橋中学に進んでも内向的で、校友会誌『坂東太郎』に短歌などを発表していましたが、文学よりも思想や哲学の本を読みふけっていました。

中学の授業でも教師の話は上の空。学校をさぼって、郊外の野原で一日を過ごして帰宅することも多く、成績は振るいません。医業を継がせようとする父親の存在も疎ましく、進むべき道を見いだせないまま、暗うつとした青春時代を過ごす毎日でした。

そうした中でも、高等学校の友人たちに議論を仕掛け、哲学や法律などについて、夜遅くまで熱く語る面もあったようです。

短歌から詩作へと
文壇への登場

前橋中学三年のころから短歌を作り始め、文芸誌などに投稿し掲載されるようになりました。十年間ほど短歌作りに熱中。与謝野鉄幹が主宰する『明星』に所属し、詩歌発表の場を広げていました。

その後、本格的に詩作に専念する中、北原白秋が主宰する『朱欒』に六編の詩が掲載。中央詩壇へのデビューとなったのです。

同じころに室生犀星の詩も『朱欒』のページを飾り、白秋や犀星とは何回も文通を重ね、前橋に招くなど、交流を深めながら詩人への道を歩み始めました。

『月に吠える』で劇的に
中央詩壇での活躍

処女詩集『月に吠える』を自費出版したのは、三十歳のとき。当時の詩人らと比べ遅いデビューでしたが、この詩集で確固たる地位を築きました。新聞の書評で好評を博して、文人らから多くの賛辞の声が。全国詩壇で劇的な成功を収めたのです。

結婚後、第二詩集『青猫』を出版。妻子と上京後は評論や詩論なども執筆しながら詩作を続け、芥川龍之介、尾崎士郎、三好達治、川端康成、志賀直哉など、多くの文人と交友を深めます。

四十二歳で離婚し二児を伴い帰郷しますが、単身で再び上京。父の死後は母や妹と二児で東京に住み、雑誌『生理』を創刊し、晩年の代表詩集『氷島』を出版するほか、明治大の講師を勤めるなど、落ち着いた中で活躍を続けました。

詩作から離れ評論を
軍国主義の中で晩年

わが国が戦争へ向け軍国主義に傾く中、詩作からは遠ざかり、評論やエッセーを多く発表。若い詩人たちと交わり、影響を与えます。五十一歳で再婚しますが、母と妻との折り合いが悪く、一年余りで離別を余儀なくされました。その後、体調が悪化し五十五歳でこの世を去ったのでした。

人間的で心癒やされる

昭和二十一年に詩集を手にしたのが朔太郎との最初の出会い。人間的で優しい詩に心癒やされました。終戦後間もない殺伐とした時代でしたから、こうした世界があったのかと、とても感動しました。

今に通じる虚無、倦怠（けんたい）感といった近代的な心情や思想が詩の言葉から伝わってきます。朔太郎はこうした能力を生まれながらにして持っていた天才。口語・文語を巧みに使い分け、当時の詩になかった哲学が現代人にも自然と理解できるでしょう。

◇

また父親が関西出身で、その血を受け継ぎながら郷土になじもう、愛したいと願った心と自分を受け入れてくれない郷土の人たちに対する憎悪に満ちた反逆心が同居する、二面性があります。研究すればするほど奥が深く、探求し尽くされない点が魅力でしょうね。

また、郷土の詩人たちに大きな影響を与え、その詩的風土の根付いた土壌が現在の詩人に脈々と伝わっているのです。前橋文学館友の会の皆さんが、こうした点を検証し続けているのは、とても意義深いことと思っています。

◇

朔太郎が残した多くの作品の中でも、「郷土望景詩」などは親しみやすく、誰にでも分かりやすいのではないでしょうか。市内にはこの中の詩が刻まれた詩碑もたくさんあります。多くの市民の皆さんに、こうした所へ行き、まずは詩を読んでほしいですね。きっと心に響いてくると思います。

萩原朔太郎研究会幹事長

梁瀬和男さん

下新田町・79歳